Tou-kiue occidentaux, p. 305 に述べた如きはそれであり、支那の學者に古くから此の說あるは博士の引用せらるゝ通りである。

② 史學雜誌第十一編同上。

王國維氏は今年六月清華學報第三卷第一期に於て韃靼考の一篇を發表された。其の大意の英文譯は氏の註記によると上海の China Journal of Science and Arts の本年六月・七月の兩號に譯載されて居るとの事である。氏の論述が常に鋭利且つ精緻で、陳垣氏等のそれと共に、近時に於る支那の史壇に生氣を附與せる一大要素であることは恐らく誰も否まぬ所であらう。此の篇亦た着眼鋭く、附するに韃靼年表を以てし、諸史に散見する韃靼に關する記事を輯錄して一目瞭然たらしむるなど、用意甚だ周到である。其の論旨の大要は唐書五代史等に於て名を知られ、契丹と抗衡の勢にあつた韃靼が、遼史金史等に於ては殆んど全く影を潛めて現はれないのに疑を發し、遼史に阻卜、金史に阻鞨の名で知らるゝに至つた部族は卽ち韃靼に外ならずとし、其の論證の爲に諸史の記事を對較し、更に何故に遼金史及び宋史などに於て韃靼と稱せずして阻卜・阻鞨などゝ呼び、若しくは韃靼と書かねばならぬ所を削り去つたかの問題に入り、之が爲に「不得不設一極武斷極穿鑿之假設」として、阻卜・阻鞨は韃靼二字の倒誤であり、然もそれは偶然の誤では無くして、故意の誤であるとし蒙古人は元來韃靼人では無いのに、漢人にしても南人にしても之を韃靼と呼んだ、かく呼ばれる事は固とより蒙古人の好まない所である。加之韃靼に關する遼金の史料の示す所は、朝貢に非れば寇叛で甚だ好ましくない、若し之を其の儘に書き付ければ漢人や南人は之を讀んで蒙古の祖先が歲ごとに遼金に朝貢したと誤認するだらう。然らば國體に係る所小ならずとして、こゝに宋遼金史の